

二度目の転生は転スラの世界だった件

ねふていー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一人の少女は神様と一つの約束をした。それは一度転生させた世界でもう一度死んだとき、初めて別の世界に力を持って転生できるという物だった。彼女は一度目の転生した世界で、人形へとなってしまう。彼女の下に集まる呪いの人形たちの心と、彼女の受けた最後の出来事により、世界の声を聴く。

一度目の転生した世界で死んでしまった彼女は、二度目の転生で転スラの世界へと来てしまったのだった。

# 目次

プロローグ	1
異世界にて豚に襲われる	5

## プロローグ

世界はいつも非情で、優しくない。世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだ。こんなセリフが頭の中をよぎる。直視したくない現実から目を背けたところで、目の前に広がる現実が変わるわけではない。変わってくれるというのであれば、いくらでも現実逃避をしよう。

しかし、変わらないというのであれば、向き合おう。それがどんなに：非現実的なことであっても：。

どうやら私は転生という物をしてしまったらしい。らしいというのも、転生した時の記憶が曖昧だからだった。この場所に来る前に誰かと会って話していたような気がするけど、詳しい内容は覚えていない。ただ一つ臍げに覚えていることがあった。「もう一度死んだとき、異世界へと飛ばされる」そんなことを言われた気がした。

転生してできた新たな私の体、それは人の姿をしていなかった。それだけではなく、話すことも動くことも、表情を変えることもすらもできない：。私に用意された新たな体、それは人形だった。

(私はなぜこんな姿になってしまっているのだろうか)

私の持ち主だろう女の子に遊ばれながら、私は考える。私で楽しそうに遊んでくれるその女の子の笑顔はとてもまぶしく、表情を変えることが出来ない私も心の中では笑みを浮かべていた。人として生まれ変わることが出来なかった私でも、嬉しいと思えることが出来てとても楽しかった。少なくとも今は：ね。

私で遊んでくれた女の子は大人へと変わり、男性と結婚し、子供を産んだ。その子供はまた私で遊んでくれていた。私以外の人形を買ったりして増えていく中、一つの人形の心が私の中に入り込んできた。その人形は私とは違い、持ち主の人から様々なひどいことを受けてきた。人形の心が：私の心を……支配して……。私の意識は闇の底へと飲み込まれていった。

目を開けると、私は空中に浮いているようだった。眼下には私の心



戻る。私達が完全に元の場所へと戻った時、私の持ち主である女の子がカッターナイフや米、コップ一杯の塩水と縫い針と赤い糸をもっていた。なんでそんなものを持っているのわけがわからない状態であると、女の子は突然私の腹をカッターナイフで切り裂き、中にはいいていた綿を取り除く。今まで私を大事に扱ってにくれたにも関わらず、いきなりこんなことをするなんて……。やっぱり人間は信用できない……。聞こえてきた声の中に痛覚無効を獲得したという声が聞こえていた。それのおかげが、痛みは一切ない。

が、今までが幸せだった分、私が彼女に恨みを持つてしまったのだった。きつと、それが合図だったのだろう。私に近づこうともしなかった人形たちの憎しみや恨みの感情が私の中に入り込んでくる。混ざり合い、憎しみは殺意へと変わる。私という魂の籠った人形は殺意を糧に動き始める。

彼女が何をやるうとしていのかは知っている。彼女は私の知っている手順のとおり、私に名前を付ける。『アリス』と、私に名前を付けた。私を冷たい水の張った桶の中に入れる。最初の鬼は彼女らしい。家じゅうの電気を消し、テレビをつける。10秒経った後、にカッターナイフを持った彼女が私を見つけて腹を刺す。

次は私が鬼らしい。彼女はどこかへと隠れてしまった。

—————  
それじゃあ、みんな。今からあの子に復讐する時間が始まるよ。

私の声と共に定位置に戻っていた人形たちがむくりと立ち上がる。彼らは私の心に入り込んできた呪いの人形たち。様々な恨みを持つた彼らは包丁やらサバイバルナイフやらをもって私の後に続く。私の体の中に彼女の爪が入っているため、ある意味私と彼女はつながっているということになる。

《確認しました。ユニークスキル『ツナガリシモノ結合者』を獲得……成功しました》

彼女の部屋へと一歩ずつ近づいていく。当然、彼女の下へと行くのは私だけではないので、彼女には複数の足音が近づいてきている音が聞こえることだろう。そして、彼女が隠れているクローゼットの扉を私は一度、叩き水の入った桶へと戻る。私はこのゲームが終わり次第

燃えていなくなるだろう。しかし、私の心の中に残った憎悪と殺意はいつまでたつても消えることがないだろう。

「私の勝ち、私の勝ち、私の勝ち」

彼女はどうかこうにかしてクローゼットの中から出ることが出来たようだった。コップの残った塩水と口に含んだ塩水をかけ、私に對して勝利宣言を行った。一人かくれんぼが終わった後、私達は外へと放り出されると、ガソリンをぶちまけられる。いつも間にか持っていたライターに火をつけると、私達の下へと落とされた。

先ほど手に入れることが出来た熱耐性も関係がないかのように、全身を焦がす。

《確認しました。エクストラスキル『熱耐性』をユニークスキル『適合者』に進化させます……成功しました》

ああ、あの人が言っていたことはこういうことだったんだ。二度目の死を感じて初めて知ることが出来た。体が消失していくような感覚と、手の届かない場所にある微かな光。私はきつとその場所を目指していくのだろう。私の心の中にある彼らの想いを胸に、私はこの世界から消失した。

《確認しました。ユニークスキル『先導者』ミチビクモを獲得……成功しました。続けてユニークスキル『結合者』アルティメットスキルを究極能力『強欲之王』アマモンに進化させます……成功しました》

ああ、よくわからない声が頭の中に響く。……でも、これできつと私を虐めるやつらを殺すことが出来るんだろう。私はもう……傷付きたくないだけなのだから。

か弱き私を殺そうとするのであれば、私はそれらを呪います。

## 異世界にて豚に襲われる

どうやら異世界という場所に来ることが出来たらしい。私は見知らぬ湿地帯にいた。眼下には人の形をした豚のような生物たちが十数万ほどはいるだろう。それらはどこかに向けて移動をしている。その方向は…私の背後の方。私の横を通り過ぎるとき、その巨体が私の体を弾き飛ばす。

《ユニークスキル『混合者』<sup>アツマリシモノ</sup>より、本体へ。殺戮の許可がほしいとのことです。了承しますか？YES／NO》

頭の中に選択肢が出現する。私の心の中に集まっている彼女たちの想いがあふれ出しそうになる。頭の中でYESを選択すると、体の中から何かがあふれ出すような感覚に襲われた。実際のところ、私の中に集まっていた彼女たちが霊体という形で姿を現していた。彼らの中には包丁やら巨大な鋏やらを持ちながらも私の合図を待つ。うずうずしている様子を見れば、今すぐにも殺したいと思っていることがわかる。

右手を上げると

「みんな、楽しくハッピーに殺戮の時間を始めよう」

——（ノ・ω・）ノオオオオオオ

振り下ろした。私の合図とともに一斉に豚たちに襲い掛かる。私もユニークスキル？という物の内容を確認しながら、豚たちを殺し始める。

《『呪殺者』<sup>ノロイシモノ</sup>の効果を説明します。

呪殺：一度でも攻撃を受けた相手を永続的に呪い、殺します。呪いの強さを自由に変えることが出来、一生苦しみ続けるだけの物や瞬間的に殺すことが出来るモノまで　様々である。

譲渡：『混合者』に呪殺のスキルを持たせることが出来る。

他にも能力がありますが、現在は上の二つのみが解放されています。残りの能力の解放条件を検索……失敗しました》

『呪殺者』の能力の一つである呪殺を使い、視界に存在する豚たちを呪い殺す。豚を処理する私たちを上空から、影の中から監視する者た



ちがいた。敵意を見せないモノ、私を殺そうとしないモノには私の呪殺者スキルは使うことが出来ない。逆に言えば、一度でも私に敵意を見せればどんなに強い相手でも呪い殺すことが出来る。

気が付けば、数万匹の豚を呪い殺していた。私はもう疲れたため、もういいかなと思っていたのだが、彼らはまだケタケタケタと笑みを浮かべながら物理的に殺していた。

——ケタケタケタケタケタケタ。あー、タノシカッタヨ。でも、チョット物足りないかもネエ。

——私の恨みは晴れない。私を殺したあいつと、アリスに危害を加えるやつらをみんなコロス。

——……コロス。私を、私達に危害を加えるやつは皆殺しだハハハハハハ。

——やっぱり、みんなは優しいな。自分のことを優先させる時もあるけど、私にも気を使ってくれる。ああ、私の心の中に入ってきたあの時から、私の心は彼女たちがいなくてはダメになってしまっている。依存……そう、依存してしまっているのだろう。

——きつと、彼女たちが私の中から消えてしまったら……。

「……奪いつくせ、強欲之王」

《かしこまりました、我が主様》

私の中から彼女たちが消えてしまう。そんな最悪の事態を想像しただけで、私は能力を全て強欲之王に権限を与える。私の体を彼女たちとアモンが使い始める。

《我が主様を脅かす者どもに『強欲之王』の名において告げる。我が主様に一歩でも近づけば、我らは貴様らからすべてを奪いつくす》

その言葉を見無視し、豚たちは一歩私に近づく。……その瞬間、豚の体は何かにかまれたかのように足の一部を残し消失していた。それと同時に、また声が聞こえてくる。

《確認しました。ユニークスキル『飢餓者』を獲得……成功しました。続けて、『飢餓者』を『強欲之王』と統合……成功しました》

今近づいた豚のスキルを得ることが出来たようだった。そのスキルは獲得できると同時に『強欲之王』に投合されたようだった。また

彼が強くなってくれたのは喜ばしいね。

今の出来事により私に近づこうとするものはいなくなっていた。誰も私から離れていく中、八匹？人？の何かが私に近づいてきた。敵意はわずかにみられるが、気にする必要はないと『強欲之王』を宥める。人型をした何かは私に話しかける。

「なんでこんなことをしたのかな？」

「私にぶつかったから。私はスキルを使った。みんなが殺したそうだったから。…貴方は私を殺そうとするの？なら、私、殺すよ、あなたのこと」

「リムル様になんて口の利き方を!!」

「シオン、落ち着け」

「すみません、リムル様」

銀髪の人型をした何かは私になぜこんなことをしたのかを問う。その問の答え方が気に入らなかつたのか紫黒色の髪をした鬼？は胸倉を掴みかかろうとするが、銀髪の人型に宥められる。

「うん、じゃ」

「オイオイオイ、一体何処に行くつもりなんだよ」

「え？私を傷つけようとしたくない人がいる場所かな。私達は人に対する恨みは強い。人と一緒に居たら、みんな…呪い殺しちやいそうなくらい」

殺意はなく、ただただ事実を述べる。人形だった私は人間に憎悪を見せる。彼らの憎悪は私に影響を与える。いい意味でも悪い意味でも。だが、彼らがいないと私の自我が崩壊する。彼らがいらない私など、それこそ人形になり下がる。

「さすがにキミを野放しにすることはできないよ。折角だし、俺のところに来ないか？」

リムル様と呼ばれていた人型は私に言う。

「人はいない？」

「俺たちの町には魔物しかいないよ。とは言っても冒険者が来たりするときはあるけどさ」

「私に敵意を向けない？」

「多分大丈夫なんじゃないかな」

「貴方、名前は？」

「俺はリムル・テンペストだ。キミは？」

「…あ、名前がなくなってる。だから、名無し？」

あの世界の名前は、この世界では名乗れない。なぜならば、あの世界とこの世界は別の世界だから。姿も形も違う。そういえば、私って何者なんだろう？

《『先導者』より、ステータスの確認を行います》

名前：—

種族：呪殺人形

加護：—

称号：—

魔法：—

技能：究極能力『強欲之王』

ユニークスキル『呪殺者』

ユニークスキル『混合者』

ユニークスキル『被害者』

ユニークスキル『飢餓者』

ユニークスキル『適合者』

ユニークスキル『先導者』

私のステータスのようなものが頭の中に見える。私はあの時から何も変わっていなかったらしい。ただ大きくなり、動けるようになっただけだったとは。悲しいこと尽くしだ。

「私は名前がなかった」

「そうか、なら俺がつけるよ。そうだな…フェイトっていうのはどうだ？」

「フェイト…運命。ああ、私は呪い続ける運命にあるのかもしれない」  
名前を付けられると体を光が包み込む。数秒もする頃には光が晴れる。すると、またもや声が聞こえてくる。

《名づけにより種族：呪殺人形は呪殺九尾へと進化しました。種族の根本的な変化により、固有スキル『呪法・詠唱破棄・妖獣化』を獲得

しました》

私は人形ではなくなったらしい。しかし、その程度のことです。私の中にいる彼らは消えることはない。むしろ、彼らだけではなく、この世界に漂う憎悪を持った者たちの心が入り混んで来るようだった。

「名前、ありがとう。私、強くなったみたい。種族が根本的に変わったし、強くなったよ…あれ？」

感謝の気持ちを伝えるために、私に名前を付けてくれた人の方向を向く。しかし、その場所にはスライムしかおらず、それを囲むかのようには鬼たちがいた。うん、なるほど。彼がリムル様なんだろう。

「リムル様！どうするんですか、今から豚頭魔王オーク・デイズターの討伐しに行くんですよ！」

「あー、すまないな」

「どれくらいあれば動ける？」

「それなりにあればいけるぞ」

「分かった。『強欲之王アァモン』、この場所に漂う魔素をこの人に与えて」  
《かしこまりました》

空气中に存在する魔素がリムル様？に集まっていく。たくさん魔素が漂っているだろうしと思っただけでやってみたが、成功したようだった。ぐたつとスライムの形に戻っていたのが嘘のように戻り、人型に戻る。

「あとは俺達に任せておけ。行くよ」

「はい!!」

ほかの鬼を連れて豚頭魔王オーク・デイズターの下へと向かう。

「うん、あー、疲れた。ちよつと眠ろうかな」

あの人たちを見届けると、近くにあった木に寄りかかり、眠り始めた。